

塑造制作による私的造形思考

One's Private Plastichought through Sculpture

溝口 守一

Shuichi Mizoguchi

これまで筆者は、彫刻というものを、思考の観念あるいは想念の記録という意味で制作に従事しているように思われる。

制作上の認識の問題といえども、形式上エトルリア彫刻、人間の感情の広さよりも深さがあり、凜とした強さに引き付けるロマネスク彫刻等の内容に引き付けられる。

特に、エトルリア彫刻には素朴さという言葉に応じる簡潔な味わいを求めることが出来るからである。

適当な折があると、これらの前に長く立ち止まっているのである。⁽¹⁾

本稿は筆者の作品で論が成り立ちうるかという疑問はあるが、思索の跡を辿ってみることは、自らの存在自身からその理法を求め、それを自らの概念に齎さねばならないことには深い意味を与えている。

彫刻の経験として、その裏打ちとしての考察記録を公とした作家として、ヒルデブラントがある。

彼は形式の見地に従って「造形美術に於ける形式の問題」と題する著述を出している。⁽²⁾

本論述の展開は、その中に負う所が多い。

彫刻の成立する過程

造形芸術とは主として、空間を基礎とする芸術である。

空間を基礎とすることは、それ等の芸術が空間性をもっているか、若しくは空間に関係づけられているという意味である。

彫刻に於いて表現される空間の性格は、それが、まったく物体その物として現れて来るものである。それは虚空間ではなくて、どこまでも充実した空間でなければならぬと言う事である。

ところで、リュッツェラー⁽³⁾はその特質として身体的に有機的なものと述べているが、それは物体というものが、人体として表現されるところに彫刻の意義を認めていると言う解釈も下すことが出来る。

一般に考えられることは、彫刻が先ず触覚的に把握され、それ故に又物体感を直接表現するところに他の芸術との相違を主張することが出来る⁽⁴⁾と考える。だがこの見解には説明を要する。

一体、芸術が作品として観照される要素は、あくまで視覚によるものである。制作の過程にはいろいろの感覚が作用するにしても、それが真に静観されるためには視覚の統一に基づかなければならないことは明らかである。だが、その観照の視覚の内にも、視覚的なもの触覚的なものの区別を発見することが出来る。

つまり空間の間接表現としての絵画は、視覚的であると称せなければならぬ。然るに彫刻はそうではない。それはあくまで、三次面の世界を三次面に表現することであり、前後、左右のあるものを実態としてそのまま表現することが出来るのである。前後左右の感覚が触覚に依って体験される限り、彫刻は触覚的であると称することは可能であろう。だが、こう言う見方も出来る。

造形芸術観照があくまで視覚上の統一に生命があるかぎり、たとえ、

触覚的效果を表現する彫刻といえどもそれは視覚的に表現されなければならぬ。視覚的であると言うことは、一定の主たる観点によって表現される絵てのものが把握されなければならない。ここで彫刻観照においての主たる観点と言うものが主唱される。

然し、彫刻に表現される立体感が、その観点からの観照のみを予定する場合は、それが建築の一部として、又は、浮き彫りなどの為に表現する場合、その論は可能であろう。独立した彫刻が多元的な物体の意識の流れを主張しようとする限り、それはただ一観点に区切られた観照に終始することは許されない。

正面、背面、側面など総てにわたって観照される事に依り、彫刻の立体表現の完結性が価値づけられるからである。

制作の過程

彫刻は、その存在感を触覚的に観照すべき事が求められるとしても、その触覚は直ちに現実に触れた感触そのものを表現すべきものであるうか。

この問いに対する答は明らかである。即ちそれは否定されなければならないと言うことである。

大理石による人体の表現は、その現実的触覚は冷たいものである。にもかかわらず、その表現の内には温かさを汲み取れるのである。現実の触覚は、観照を助ける限り活用され、観照を妨げる限り捨て去られると言う事である⁴⁾。

これは彫刻のみではない。文学は、それが虚構であると言う意識は、やがて、その観照の途上に於いて、若しくは観照の瞬間より消え去るのである。それ故に、触覚は彫刻に於いてどこまでも観照の為の触覚

として作用していると言う事である。

彫刻の成立する過程は、二種の純粹視覚活動を指し、一つを静かに、遠方に一目対象として見得る時の遠像として、一切が統一された平面上のように見える場合の視覚表象であり、もう一つを対象に接近して、目を移動しながら時間の連続的な運動の中で知覚する事に依って、恰も触覚するような関係で見るときである。

結びにかえて

然し、彫刻はただそのような触覚性のみを表現してはいない。それには絵画性や建築性の導入も考えられるのである。

無論、芸術はその各々が相互の性格を夫れ夫れ活用している事は、唯この彫刻のみではない。絵画に於ける遠近法が視覚の手段として彫刻的に活用されている。しかし、それは大きい距離を持った空間ではなくて、独立した彫刻に於いて表現する時には完全に打ち消されているのである。それ故に、その彫刻に於いての実際上の感覚、即ち、触覚的な空間把握に依って絵画上の表現を試みる時、そこには誇張のない「調和と安定感」「存在」を知覚するのである⁵⁾。

(1) 以下の内容は、拙稿「エトルリア彫刻」のごく粗い要約である。

「エトルリア彫刻とはイタリア半島における古代ローマの先進国であるエトルリア人によって造形されたものである。エトルリア彫刻における写実主義的性格は、のちのローマ彫刻の源流であったばかりではなく近世イタリア彫刻の背骨となっている。

そこで筆者はエトルリア美術、特に彫刻が近世に与えた影響について制作実験を中心に造形要素の考察というテーマをにかけてイタリア

に赴いた。本稿ではエトルリア彫刻の及ぼした影響の一面についてミケランジェロのキリスト降下像ピエタとマリノ・マリーニの作品群^②に焦点をしばり現地にて入手した主題に関連ある取材をもとに主観的考察を進めてみたいと思う。

休暇を利用してイタリア半島を旅していた筆者の強烈な印象は当時フィレンツェ大聖堂におかれてあった大理石群像ピエタの醸す精緻な空間であった。晩年のミケランジェロが一五四九年頃から数年にかけての制作と証されるもので自らの死を予期して彫り始めたものだという。この群像に近づいて驚いたことに刻まれたのみの痕跡は四世紀半の年月がいつしかこの前を流れていった現実を全く打ち消してしまうほど繊細に保たれ生彩ある主題の詩的表現を永遠づけて存在していることであった。周知のごとくミケランジェロはこの群像を制作するにあたっての手掛りをエトルリア石棺の高浮雕に学んだという。歴史家野上素一はこの伝記について調査しているがそれによると事実ミケランジェロがしばしば古都ボルテルラに滞在して物に憑かれたようにさまよい歩き古代石棺の浮雕に眺めいったという^③。

この挿語は確かにエトルリア彫刻がミケランジェロの造形思考に与えた影響の一面を伝えるものであろう。ここに裏づけられる石棺は現在フィレンツェ考古学博物館^④に保存されている。九人の人物が構図いっばいに表現されており傷ついた兵士は力が抜けてしなだれかかる風情をみせている。右脇を別の兵士が背後から支え立ち、足と腰を向って右側の兵士がもちあげようとしている。鋭い写実精神と装飾的性格のこめられたものでエトルリアのもつ造形性が彷彿として偲ばれるものである。

ミケランジェロのオリジナリティーピエタがこの石棺に根ざしている

るといふふうに強調されている挿話に対してここで述べられることは強い否定よりも慎重な肯定で答えた方が妥当であろう。このことはエトルリア人のもつ造形思考が今世紀最大の彫刻家マリノ・マリーニに与えた影響と雁行して考察すると興味深い。彼は彼自らが生前言い残しているようにエトルリア彫刻そのものを造形するのではなくしてそこからヒントを得てエトルリア人の詩というものを造形したのだという^⑤。先人の残した造形にヒントを得て思考基盤を築き、これまでとは異なった存在で空間に新しい秩序を生みだしたマリノ・マリーニを美術史上巨匠として、不朽の名を留める所以も又そこにある。

イタリアを旅してみても極論すればエトルリア彫刻の残した影響は余りにも大きく近世彫刻史そのものの運命がそこに集中した観を否応なく実感として抱かせられるものである。」

- ① La Pietà di Michelangelo (ora Firenze-museo dell'opera del duomo) Michelangelo, settantaquattre 1549 in principio il gigantesco gruppo della pietà fiorentina.
Marmo-altezza mt. 2.26-larghezza mt. 1.50-profondità mt. 1.10-peso q. li 35
- ② Marino Marini (1901~1980) Mostra: Marino Marini dal 1914 al 1977 Centro di cultura di palazzo Grassi Venezia 28 maggio/15 agosto 1983. Centro di documentazione dell'opera di Marino Marini, Comune di Pistoia. ①取材。
- ③ 野上素一他著 沈黙の世界史 新潮出版
標題記事
- ④ URNA IN ALABASTRO TRASPORTO DEL CADAVERE DI PATROCLO
<DA VOLTERRA> BRUNN URNE ETR I TAV. LXVII-2
Alabaster-altezza mt. 0.48-larghezza mt. 0.70-profondità mt. 0.27 Il Museo Archeologico di Firenze ①取材。
- ⑤ 本人はさういわれたり書かれたりすることを嫌って「影響を受けたのではなくて私自身が Etrusco である」Centro di documentazione Marino Marini la gioia nella scultura ①引用。Pistoia: Palazzo Comunale ①取材。

Catalogue of Krishima Open-Air Museum 2001 p.94 抜粋
Dress Oneself 1988 Bronze 158×43×23cm



Though he began his artistic journey in the tradition of realism, he fell in love with the unique civilization of the Mediterranean left by the Etrurian people.

A strong influence of Etrurian art became prominent especially in his works in the latter half of the 1980's.

The simple and light-hearted treatment of the mass and volume with gentle lines creates a beautiful form and a sense of liveliness, a clear indication of his admiration for the Etrurian sculpture.

「具象造形の伝統を歩きながらも、エトルリア人が残した地中海的な異色文明を愛し、八〇年代後半から作品にも大きな影響が表れることになる。素朴で明るく、単純化された量塊と静かな線が、美しいフォルムと生命感を醸し出す表現方法は作者が傾倒しているエトルリアに

深いかわりがあることが明らかである。」

(2) Adolf Hildebrand: Das Problem der Form in der bildenden Kunst, 1893.

清水清訳「造形美術に於ける形式の問題」一九二七
加藤哲弘訳「造形美術における形の問題」一九九三

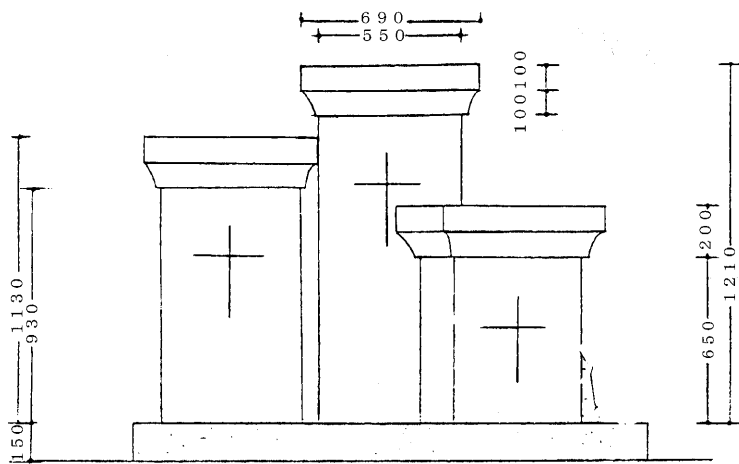
(3) H. Lutzeler: Grundstile der Kunst. 1934. 大西克禮「現象學派の美學」1937, pp.180-181

(4) フィレンツェ Galleria dell'Accademia に残る Michelangelo, Buonarroti の彫刻が先入見の源かもしれない。

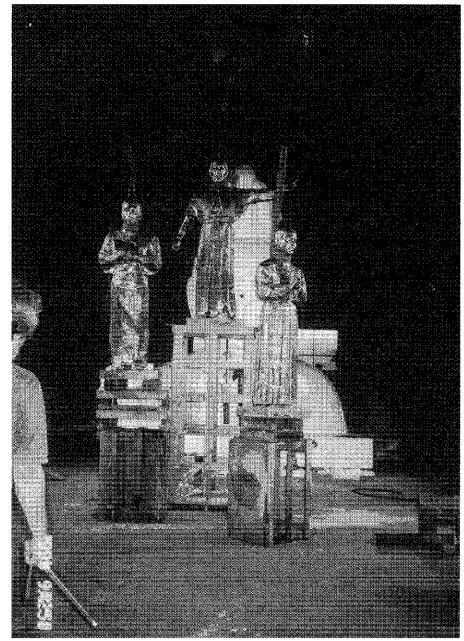
石塊から湧き上がる大理石未完成作品、聖マタイや身を振る髭のある奴隷、これらの作品を前に知覚するには、もはやそこには大理石の素材性質は抽象されている。

(5) 遠くからの観照と、近くからの観照に与える印象は決して同列に論じる訳にはいかない。同じ見かけの姿でも、近くで見れば目を実際に動かして触れ確かめることができるのでその立体性は理解できるが、遠隔像としてみればその立体性が全く不明瞭になってしまうことがある。

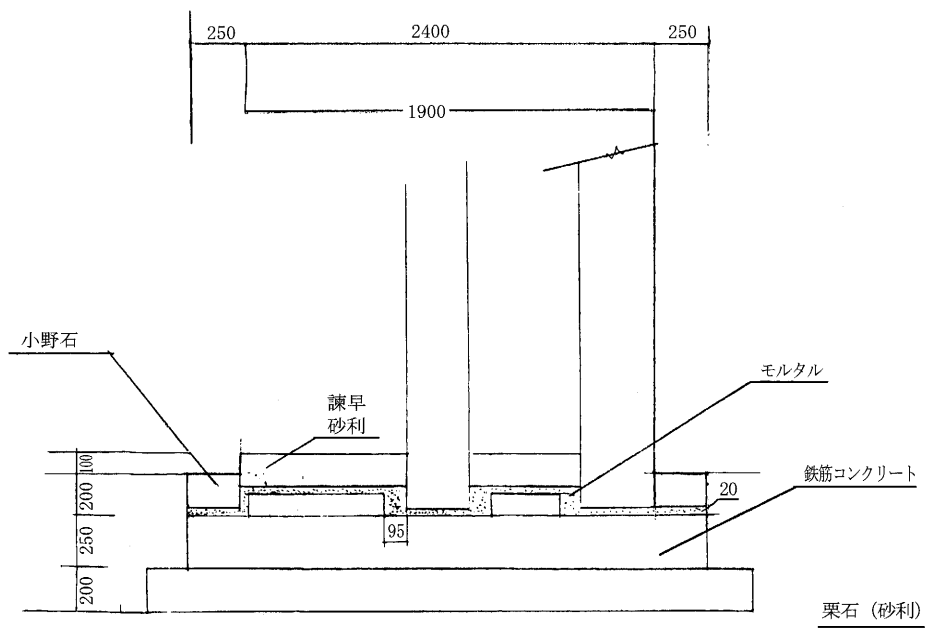
どのような種類の見え方が実際に生じて、どのような配置でまとまりのある印象としての視覚像が得られるのか、視覚上の統一像を得るために、Bronze 着色前に複数の設置を試みる。



ザビエル記念碑立面図 1 : 20



The Statues of St. Francis Xavier, Yajiro, and Bernard 1999 Bronze



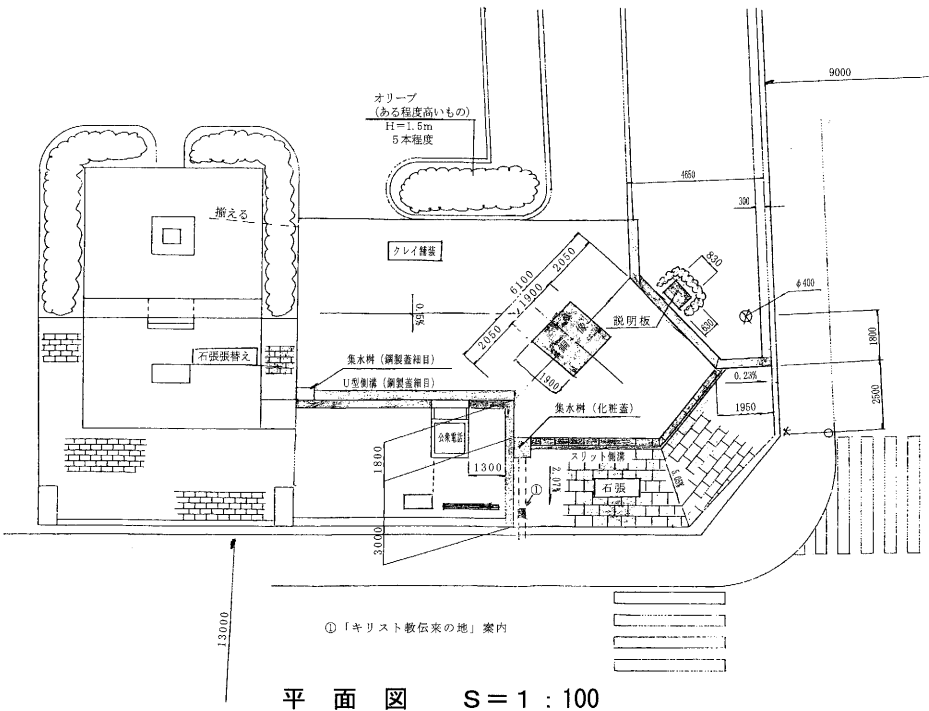
構造図

周囲と背景とをもった彫刻に、遠像として一切が統一された、視覚表象を得る為に、順序を追いながら全体把握を試みる。



拙稿「ザビエル上陸四五〇年記念碑」目録 一九九九

イタリア留学中に見たもの、その他多くの作家の彫刻や絵画を、静



平面図 S=1:100

少しでも多く美しいものを満たしたい、という思いをこめた。

(二〇〇五年十二月一日 受理)

かに思い出していた。さて、制作となると、私は現在に生きている日本人だ。しかもザビエルは聖人だ。キリスト教の生活習慣をもたない私も、ザビエル、アンジロウ、ベルナルドの世界へ深くひきこまれていった。まもなくして、私はザビエルが生まれ育った冬のザビエル城を訪れた。城内の窓際に立つと、眼下には、褐色の丘にオリーブの群がすっぽり陽をあげ、端正なフォルムで列をなし、流れる川は静かに美しく、一片の雲さえなかった。ザビエルは等身大の聖人だ。服装も、何も飾りたてる必要はない。やがて、私の中に私のザビエル像が形造られていった。ふたりの薩摩人に対するザビエルの贈りものとして、自分の魂の安らぎを求めて神のことばを探すアンジロウ、イベリア半島コインブラに眠るベルナルドには、自分の魂に、